

カセサート大学への留学を終えて

私が留学を経験したのは今回が三回目だった。一度目は、高校一年生の時に参加した三週間のオーストラリアでの短期交換留学、二度目は高校二年生の時に参加したカナダへの一年間のプログラム、そして三度目が今回のタイ留学である。人生で三度も留学を経験するとは思っていなかったが、どの留学も私にとって貴重なもので、大きさに言えばそれぞれが私の人生を変えたと言っても良い。オーストラリアで海外の素晴らしさに気づいていなければ、カナダへ一年間も留学したいとは思っていなかっただろうし、カナダでの経験がなければここまで国際的に活動したいと強く思う人間にはなっていなかっただろう。そして今回のタイへの留学がなければ、今まで気づいていなかったことに気づくことはなかったかもしれない。

私は、大学入学当初から派遣留学に応募することを決めていた。留学する国は正直に言えば、ここと言って行きたいところがあるわけではなかった。ただ、もともと興味があった農業について学び、何か今までにない新しい経験をしたいと考えていた。そう思い留学先を探していたところ、タイ、バンコクにあるカセサート大学を見つけた。カセサート大学は、タイで初の国立農学科大学として設立され、タイの大学で唯一農学部インターナショナルコースがある大学である。タイは、前から興味があった国でもあり、今まで行ったカナダやオーストラリアとは全く異なる雰囲気が味わえると感じた。また、タイはアジアの中でも農業が盛んな国であり、農業普及にも取り組んでおり、日本とは異なる形で農学を学ぶことができると思い、カセサート大学に応募することを決めた。

私が農学に興味があるのは、祖父母が農家であったことと、以前から特に食糧問題等に興味があり、人々の食を支える農業はそのような問題を考える上で不可欠だと感じていたからである。タイで農業について学ぶことは多かったが、私は千葉大学では国際教養学を専攻しており、農学についてあまり専門的な知識を身につけていなかったのが、少し後悔した点である。日本とは異なった農業を行うタイであるが、どのように異なるのか、どのような点で日本よりも優れているのか、などを細かく比較することが難しかったからである。また、農学部出身の他の留学生に比べて、知識が浅いのは正直感じたし、農学の中でも学びたいことが具体的に決まっている人が多かったことに対して、私は、タイの農学を学ぶという漠然とした目的しかなく、少し劣等感と疎外感を感じた。しかし、国際教養学部にも所属していることで、様々な分野に興味が出て来たり、タイで他の留学生とは異なった観点から物事を観察できたりしたことは、非常に満足している。何より他と目的が違うからこそ、より積極的に農学以外のことに対しても行動する力になったことは良かったと感じている。

私は、この留学ではやりたいことをできる限り叶えようと思っていた。私がタイで学びたかったのは、農学、英語、そしてタイに存在する問題について知ることであっ

た。カセサート大学農学部で学ぶことで、国内の農業に関する課題、そしてどのような取り組みが行われているのか詳しく知ることができたが、バンコクは想像以上に発展しており、もはや途上国ではないと思うほど、生活が豊かであった。タイは世界でも貧富の差がトップクラスであるほど、格差問題は深刻なものであるのに、バンコクではそれが全くと言っていいほど感じられず、これでいいのかと疑問に思っていた。このままではタイの現状を知るという目的を果たせないのではないか、せつかく日本を出ているのだからもっと現地を知りたいと思い、インターネットで現地 NGO を探し始めた。そこで見つけたのが、バンコク最大のスラムで活動する教育系団体であった。そこは日本人によって設立され、貧困層の子供たちの教育支援のために図書館の開放や移動図書館を主な活動として、現在は日本人スタッフ二人とタイ人スタッフ約十人で運営している。日本語のウェブサイトがあったため、連絡してみたところボランティアとして受け入れてくださることになり、週に一度ほど子供たちと遊んだり、英語を教えたり、団体が運営するアクセサリーブランドの手伝いなどをしていた。ただ、週に一度のみの活動と言語の壁があったことで、思うように活動できなかったのが悔やみである。自分が何ができるのか、どのようにしたらその図書館に貢献できるのかを見つけるまでに時間がかかってしまい、あまり貢献したという実感は得られなかった。しかし自己満足でしかないが、スラムで活動するという経験と人の繋がりを作れたことは、自分にとって最大の収穫であった。その繋がりを利用して、タイで活動する日本人に海外で働くこと、国際協力を仕事にすることなどについて話を聞きに行ったり、春休みに海外インターンをしたいと思っていたので、そのインターン先を探したりすることができた。半年間しかないという制限とせつかくタイに来ているという使命感で、日本にいる時よりも私にしてはかなりアクティブに行動していたと思う。

私の一番大きなステレオタイプの変化は、貧困＝不幸とは限らないということ。スラムのボランティアで多くの子供たちと出会ったが、誰一人として不幸には見えなかった。貧困の定義は様々で、確かにその子供たちは毎日食べることに困るほど深刻な貧困に陥ってはいないし、学校に通うことができている子供がほとんどであった。しかし、バンコクの中では彼らは貧困層におり、十分な教育を得ることができていないが、それで不幸に感じるのではなく、自ら図書館に来て勉強しようとする姿勢に感動した。移動図書館に行った時も子供達はものすごい勢いで本を選んで、一人短い時間の中で何冊も読もうとしていて、本がすぐそばにあるという状況に慣れてしまっていた私は、本を読むことにどれほどの価値があるのかを忘れてしまっていたことに恥ずかしくなった。スラムのボランティアで学んだことは、教育とは、与えられるものではなく、自ら掴んでいくものであるということ。そして、幸せとは個人によって異なり、誰が何に対して幸せと感じるかは、外から見ただけではわからないということである。こちらが良かれと思って支援しても、間違った方向に行ってしまう可能

性も十分にある。だからこそ支援やボランティアをする時は相手を深く知ることが大切であり、自分の尺度で相手の幸せを決めつけてはならないと感じた。

また、タイで長く生活することで、他にもいくつか気づきがあったので、ここに書きたいと思う。タイは LGBT に関して寛容だというのは前から知っていたが、LGBT だけではなくほとんど全てのことにに関して寛容であると感じた。タイ語には「マイペンライ」、日本語で「大丈夫」とか「気にするな」を意味する言葉がある。タイ人は「マイペンライカルチャー」と呼ばれるほど、よくこの言葉を口にしている。実際、約束に遅刻してもマイペンライ、何か失敗を犯してもマイペンライ、とよくマイペンライと言っているのをよく耳にしていた。最初はなんて適当な国なんだと思っていたが、次第にこの言葉の素晴らしさに気づいてきた。私はタイでは外国人であり、いわゆるマイノリティだったかもしれないが、ほとんど生きづらさみたいなものを感じなかった。おそらくタイ人のマイペンライ精神からくるその寛大な雰囲気こそがそうさせてくれたのではないだろうか。タイ語が全く分からなくても嫌な顔をする人はいないし、困ってたら見ず知らずの人でも助けてくれたりする。私は、タイ人には人と違うとか人と同じだとかそのような概念はないと感じた。LGBT に属する人たちにしても外国人にしても人は人であるし、その人たちに対して悪く言ったりはしない。日本には良いところがたくさんあるし、日本人として誇りを持っているが、いじめ、偏見、差別なども多く存在する。そして、マイノリティと呼ばれる LGBT に属する人々や外国人、障害者などが生きにくい国になっていると感じた。私自身もそうであるが、日本人は、他人がどう思っているとか人と違うとか様々なことを気にする傾向があり、マジョリティ、マイノリティという区別を自然としていると感じる。タイに差別や偏見が全くないとは言い切れないが、少なくとも日本よりは個人が自分を隠さずに生きることができる世の中に近いのではないだろうか。だからこそ私はタイで生活することを通して、自分のことが好きになったし、前よりも堂々と生きられるようになった。「マイペンライ」は私にとって魔法のような言葉である。マイノリティがもっと日本社会に受け入れるようになるには、私たち若い世代が動くことが必要であるのではないだろうか。

今回の留学で達成できなかったことは、二つある。一つは語学力についてである。英語力を向上させることが一つの目的であったが、日常生活で英語を使わないタイでは思ったほど向上できなかった。複雑な単語や文章での会話はほとんど使うことはなく、スムーズな会話はできるようになったが、会話のレベルは上がらなかったように感じる。正直に言えば、これは日本でもできることなので、帰国後に取り組み直したい。もう一つは、Table For Two をタイの日本食レストランで普及させるということである。これは、私の直前にタイに留学していた同じサークルの先輩から引き継いだものであるが、普及までには至らなかった。期間に限りがあり、所詮留学生である私

に普及できると思っていた考えの甘さに情けなくなり、落ち込んだ。帰国直前にお話を伺った WFP 職員の方に良いアドバイスをいただいたものの、そのアドバイスを生かせず、結局何もできずに帰国するという結果になった。このプロジェクトに貢献してくださった方々、レストランの方々に対して、本当に申し訳のなさでいっぱいであると同時に、自分の未熟さと時間の制限を全く把握してなかったことに深く反省している。

そんな中で今回の留学を通して最も伝えたいことは、人との出会いの貴重さである。留学に行く理由は人それぞれであるが、異なる価値観や文化を持つ人々に出会うことは私にとって非常に刺激になることで、これも留学に参加する価値の一つではないだろうか。日本にいても多くの人と出会うが、異国の地で出会う人たちとは外国人に限らず日本人でも不思議な絆が生まれたり、普段話さないことを話すことができたり、ある意味で特別な存在となりうる。ゆえに、私は自分なりに友人を作ろうと積極的に話しかけたり、様々な経験をしたりして、できる限り多くの人に出会おうとした。現代はインターネットで何でも調べることができるが、人から直接聞いた話にはかなわない時もある。その人の考え方、宗教や文化の違いなど直接肌で感じることは、前に述べた気づきを含め、非常に大切であるし、留学でしか得られないことでもあると思う。それぞれが違って当たり前であり、違うと言って排除するのではなく、それを受け入れることで見えてくることも多くある。自分の考えに誇りを持ち、他の考えを尊重する人たちに多く出会い、留学前は、自分の持つ考えに自信を持てなかったり、人に流されやすかったりした私であるが、それが少しずつ変わった気がする。

そして日本を客観的に見る力がついた。日本にいてはきっと気づくことのできなかつた日本の良くないところや、今まで疑問に感じていたことのヒントになること、また反対に日本の素晴らしさにも気づくことができた。私は日本という国が好きであるし、守って生きたい文化や伝統が多くある。しかし、この国をより愛することができるにはもう少し、改善するべき点があると感じた。それら全てを直すことは難しいが、少しずつタイで学んだことを伝えながら、日本での活動に活かして生きたい。現在、途上国への給食支援を行う団体と難民と関わる団体に所属しているが、今回の留学でそれらの活動について見直すきっかけにもなった。私に何ができるとか具体的に何がやりたいとかはまだないが、様々なことに気づいた今なら以前よりも意味のある活動ができる気がする。また、WFP、FAO、JICA、現地 NGO、大使館など様々な局面から国際的に活躍する方々にお話を伺い、ボランティアと働くことの違い、国際問題への関わり方の多様さを知ることができ、将来自分のやりたいことを考えるのに非常に参考になった。卒業まであと二年あるが、将来のビジョンを描くことは、この先の学びにも大きく影響すると考えている。まだ迷いや葛藤は多くあるが、少しずつ方向性が定まってきた。この先、様々な経験をしたり、知識を得たりすることがあると思うが、

2019/02/20

そのそれぞれが大きな学びになるよう精進していきたい。